

中世絵画史料《遊行上人縁起絵》《聖徳太子絵伝》 《融通念仏縁起絵》諸本にみる不具および犬神人の 描写に関する予備的考察

末森, 明夫
国立研究開発法人産業技術総合研究所

<https://doi.org/10.15017/4377793>

出版情報 : 障害史研究. 2, pp.41-62, 2021-03-25. Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

中世絵画史料《遊行上人縁起絵》《聖徳太子絵伝》 《融通念仏縁起絵》諸本にみる不具および犬神人の 描写に関する予備的考察

Preliminary Consideration to Disabilities and Lepers Depicted
in Medieval Pictures, “*Yugyō Shōnin Engi*”, “*Shōtoku Taishi Eden*”,
and “*Yūzū Nembutsu Engi*” in Japan

末森 明夫

SUEMORI Akio Ph.D of Molecular Biology

(国立研究開発法人産業技術総合研究所)

(National Institute of Advanced Industrial Science and Technology)

要 旨

従来の障害史研究は文字史料に偏っており、非文字史料を活用し切れていないという反省に立ち、障害史研究の展開における歴史図像学の援用をはかるべく、中世日本絵画史料の《融通念仏縁起絵》《遊行上人縁起絵》《聖徳太子絵伝》にみる不具や癩の描写の変化をたどり、中世日本の信仰の世界にみる障害認識の変容を明らかにすることを通して障害史研究に資することを試みた。

まず《遊行上人縁起絵》諸本〈甚目寺施行〉にみる不具や癩の図様ないし構図の対比をおこなった。不具描写には躄跛や盲がみられたものの、いずれも乞食非人の輪の周縁に描かれており、乞食や不具の層の内部に階層性が存在することが窺われた。続いて《聖徳太子絵伝》諸本の〈無遮会〉にみる不具・癩描写の対比をおこなった。鎌倉時代以降の南都および真宗系諸本には癩描写がみられた他、南都系諸本には躄や跛の描写もみられた。最後に《融通念仏縁起絵》諸本の〈念仏勧進開始〉にみる不具や癩描写の対比をおこなった。祖本の影響が強く見られる甲系諸本よりも乙系諸本のほうが躄が早く描かれる傾向が窺われたものの、明德版本ではさまざまな不具や癩の描写が同じ円座の下に描かれるようになる経緯が窺われた。

《遊行上人縁起絵》《聖徳太子絵伝》《融通念仏縁起絵》にみる不具や癩の描写は時代が下ると共に、階層性が薄れていく様相が窺われ、穢れを始めとする中世日本にみる不具・癩に対する認識の収斂と分岐が平行して生じていることが窺われた。一方、聾や瘡癩に関する記述は文字史料には普通にみられるにも拘わらず、《融通念仏縁起絵》《遊行上人縁起絵》《聖徳太子絵伝》に聾や瘡癩の図像を認めることはできず、不具描写にみる顕性的ないし潜在的な不具図像とでもいべき特性の違いがみられた。

ABSTRACT

This note canvasses transitions of disabilities and/or lepers depicted in medieval manuscripts comprised three well-known pictures, “*Yugyō Shōnin Engi*”, “*Shōtoku Taishi Eden*”, and “*Yūzū Nembutsu Engi*” in Japan to contribute to the historical iconography from the viewpoints of changes of social recognition for the disabilities and/or lepers.

First, we compared design/layout of disabilities and/or lepers depicted in scenes of “*Jimoku-Ji Segyō* (tr. Charity for the poor, beggars, disabilities, and lepers)” concluded in the “*Yugyō Shōnin Engi*”, indicating only cripples and blind persons who were portrayed around a communal dining circle for beggars. This arrangement

strongly suggested visually a hierarchy in the class of beggars and disabilities. Second, measuring scenes of “*Mushae* (tr. Charity)” in manuscripts of the “*Shōtoku Taishi Eden*”, providing new knowledge that disabilities and lepers had become popular as a subject painted in the scenes in addition to the poor and beggars since the late middle ages. Finally, observing scenes “*Nembutsu Kanjin* (tr. a mass in Buddhism)” concluded in the “*Yūzū Nembutsu Engi*”, uncovering a change that disabilities and lepers were equally arranged with un-disabled beggars in a communal dining circle in the latest manuscript, however, that the disabilities had painted prior to the lepers in early manuscripts.

The finding regarding the layout of the disabilities and lepers in the medieval pictures profoundly indicated reduction of the hierarchy in the poor, beggars, disabilities, and lepers with the times in the middle ages because of the changes, which comprised the convergence and divergence, of recognition for the disabilities and/or lepers. However, the deaf or deaf-mute was not observed in above mentioned pictures, suggesting an *aporia* that there were *dominant* icons for the disabilities such as the cripple or blind persons and *recessive* ones like the deaf or deaf-mute.

1 はじめに

身体障害者 (= 不具)、知的障害者 (= 癡)、精神障害者 (= 癲狂) やハンセン病患者 (= 癩) を対象とする近世以前の日本にみる障害史は、医学史や社会福祉史に連関布置される形で展開がはかられてきた(服部 1945、1955、1964、1971、1978、横井 1974、河野 1987、桑原 2014)。しかし従来の障害史は文字史料に依拠する傾向が強く、絵画史料を始めとする非文字史料を十分に活用してきたとは言いがたい。黒田(1986a)は従来の史学は絵画史料の実証性が十分に評価されていないという反省の下に、絵画史料と文字史料の整合的把握に基づく歴史図像学を提唱した。

一方、仏教史や民俗学を始めとする各領域においては、中世日本の仏教思想にみる穢れ認識や中世賤民⁽¹⁾の様相が可視化され、障害史にも少なからぬ影響を与えてきた(勝田 1992、吉岡 2012、阿部 2017、船田 2017、片岡 2017)。しかし中世日本の仏教思想を窺い知る絵画史料を題材とし、[不具]⁽²⁾という属性が当時の社会からどのように認識され、どのように可視化されてきたのかを通時的に考察した例は少ない(石井 1997、細田 2002、加須屋 2012)。

ただ幸いなことに、院政時代(1068-1221)、鎌倉時代(1221-1333)、南北朝時代(1333-1392)、室町時代(1392-1573)、および織豊時代(1573-1603)に

わたって、同じ宗教的題目の下に数多くの写本(絵巻物、掛軸、屏風絵など)が制作された《融通念仏縁起絵》⁽²⁾、《遊行上人縁起絵》や《聖徳太子絵伝》には、さまざまな[不具]が描かれていることが知られている(河野 1987)。本稿は《遊行上人縁起絵》、《聖徳太子絵伝》や《融通念仏縁起絵》の諸本にみる[不具]描写を整理し、歴史図像学を視座とする害史を構築するための予備的考察をおこなう。

2 《遊行上人縁起絵》

2.1 《遊行上人縁起絵》諸本の系譜

《遊行上人縁起絵》は前半の4巻を時宗の開祖・一遍の伝、後半6巻を二祖・他阿の伝にあてた絵巻物であり、祖本は14世紀初葉に成立したものと考えられている(宮 1968)。宮(1979)は20数本にわたる現存諸本の図様や構図を対照し、甲系統、乙系統および丙系統に分類した⁽³⁾。

しかし黒田(1986b:140)は「真光寺本は奥書に元享3年(1323年)が記されているものの、画風や図様より室町時代中後葉に制作された可能性が高い」と述べている。一方、津田(2018)は諸本の詞書にみる筆跡や内容の対照をおこない、「室町時代後葉(15世紀後葉~16世紀前葉)に制作されたものとみなされていた金蓮寺本は14世紀中葉(1350年代)に制作されたものであり、甲系統に属する金蓮寺本、金光寺本、東博本は共通の親本の下に14世紀中後葉に

表1 《遊行上人縁起絵》諸本

諸本	所蔵	制作時期	型	備考
金蓮寺本 ⁽¹⁶⁾	金蓮寺	南北朝時代(1350年代)	絵巻物	
金光寺本 ⁽¹⁷⁾	金光寺	南北朝時代中後葉	絵巻物	
東博本 ⁽¹⁸⁾	東京国立博物館	南北朝時代後葉?	絵巻物	
光明寺本 ⁽¹⁹⁾	光明寺	織豊時代~江戸時代	絵巻物	古縁起本(14世紀中葉)の模本
真光寺本 ⁽²⁰⁾	真光寺	室町時代中葉?	絵巻物	

制作された子本である可能性が高い」という見解を呈した⁽⁴⁾。本稿では黒田(1986b)、中村(2017)、津田(2018)が示した《遊行上人縁起絵》諸本の系譜にしたがい考察を進める(表1)。

2.2 《遊行上人縁起絵》にみる〈甚目寺施行〉

《遊行上人縁起絵》の第3巻第1段〈甚目寺施行〉⁽²⁾は一遍が尾張国の甚目寺で施行をおこなったときの様子を描いている。

金蓮寺本《遊行上人縁起絵》「第3巻第1段詞書」尾張国甚目寺は推古天皇御蒼海の底より観音の像を感得し奉て伽藍を建立す、靈験無双の本尊也、爰聖請に応じて当寺にして七カ日の行法を始行給ひけるに、供養力尽て寺僧等歎合ければ、聖曰、志あらば何日なりとも留べし、衆生の信心より感ずれば其志を受許也、されば仏法の味を愛樂して禅三昧を食すといへり、若身の為に衣食を事とせばまたく衆生利益の門にあるべからず、暫在家に立向は是随類応同の儀也、ゆめゆめ歎給べからず、我と七日を満ずべしとの給ける(黒田1986b:144)。

〈甚目寺施行〉には施行にみる「一遍および側近」[乞食僧の輪][乞食非人の輪][犬神人(=癩)の輪]が描かれており、中世賤民の階層関係が窺える希有な絵画史料として夙に知られている(黒田1986b⁽⁵⁾、1986c、石村・田中1997、砂川2007)。このような中世賤民にみる階層関係には中世日本社会における穢れ意識が大きく係わっているという論攷も数多くみられる(黒田1986b:239、勝田1992、阿部2017、船田2017、片岡2017)。

2.3 〈甚目寺施行〉にみる「不具」描写

本稿では江戸時代初葉以前に描かれた現存諸本より、甲系統⁽³⁾の金蓮寺本、金光寺本、東博本、乙系統⁽³⁾の光明寺本、丙系統⁽³⁾の真光寺本の5本を選択した(表1)。各本〈甚目寺施行〉には、図様より容易に判断し得る「不具」でもある「躰」や「盲」を認めることができる(表2)。そこで各本〈甚目寺施行〉にみる「躰」(図1)や「盲」(図2)の図様や位置を比較した(図1)。

金蓮寺本は「乞食非人の輪」の左下に1人(図1a)、金光寺本は「乞食非人の輪」の下に1人、右下に2人(図1b)、東博本は「乞食非人の輪」の左下に1人(図1c)描かれており、「躰」の構図に類似性が認められる。しかし光明寺本は「乞食非人の輪」の右下に1名(図1d)、真光寺本は「乞食非人の輪」の左上のやや離れたところに1名(図1e)描かれており、「乞食非人の輪」と「躰」の構図は金蓮寺本(図1a)、金光寺本(図1b)、東博本(図1c)とはかなり異なっている。

図1に示した7人の「躰」はいずれも両手に「躰下駄」をはめ、膝には膝当てをあてて四つ這いになっている様子が描かれており、これを「躰A」とする。図1bには膝に膝当てをあてていない「乞食」がみられるが、この人物が「躰」であるかどうかは判断できない。光明寺本には長い棒を持った人物(図1

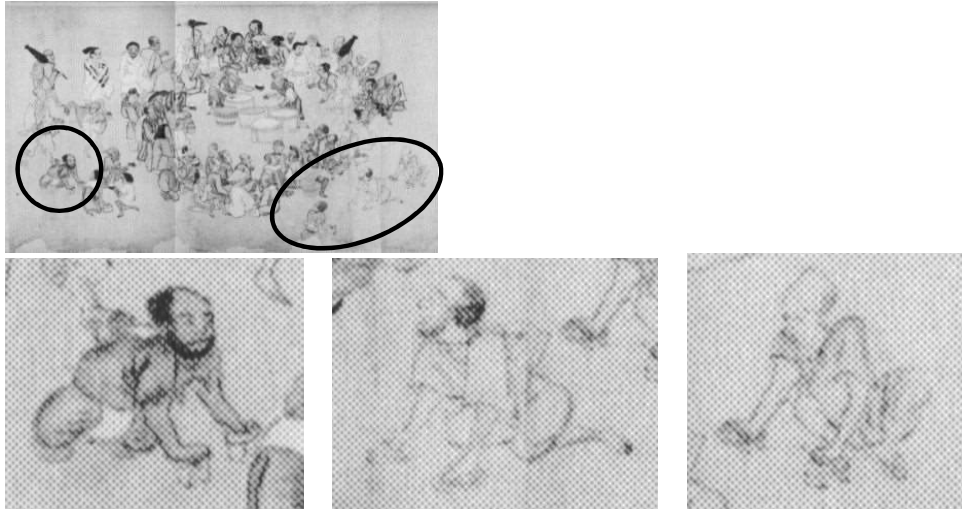
表2 《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉にみる属性

諸本	系	[躰]	[跛]	[盲]	[三人の輪]
金蓮寺本	甲	1		1	1
金光寺本	甲	3		1	1
東博本	甲	1		1	1
光明寺本	乙	1	1?		
真光寺本	丙	1			1

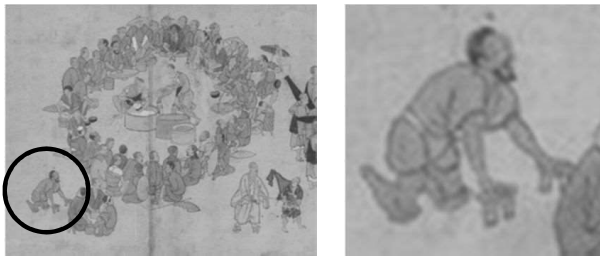
(a) 金蓮寺本



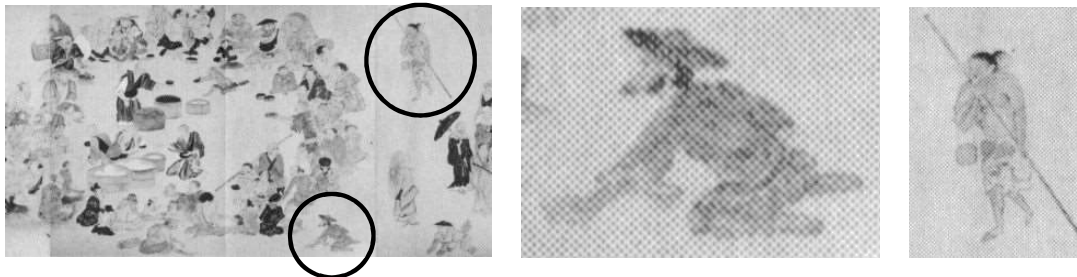
(b) 金光寺本



(c) 東博本



(d) 光明寺本



(e) 真光寺本

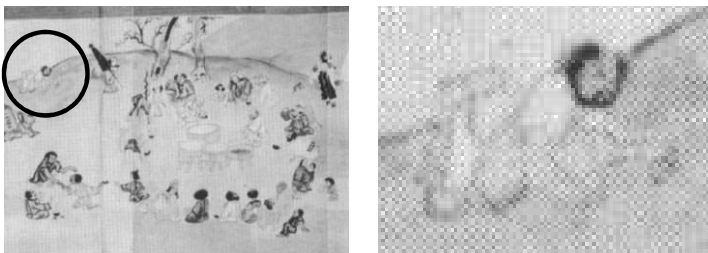


図1 《遊行上人縁起》諸本〈甚目寺施行〉にみる〔躰〕〔跛〕
〔躰〕〔跛〕は丸で囲み、〔躰〕〔跛〕の拡大像を右に示す。

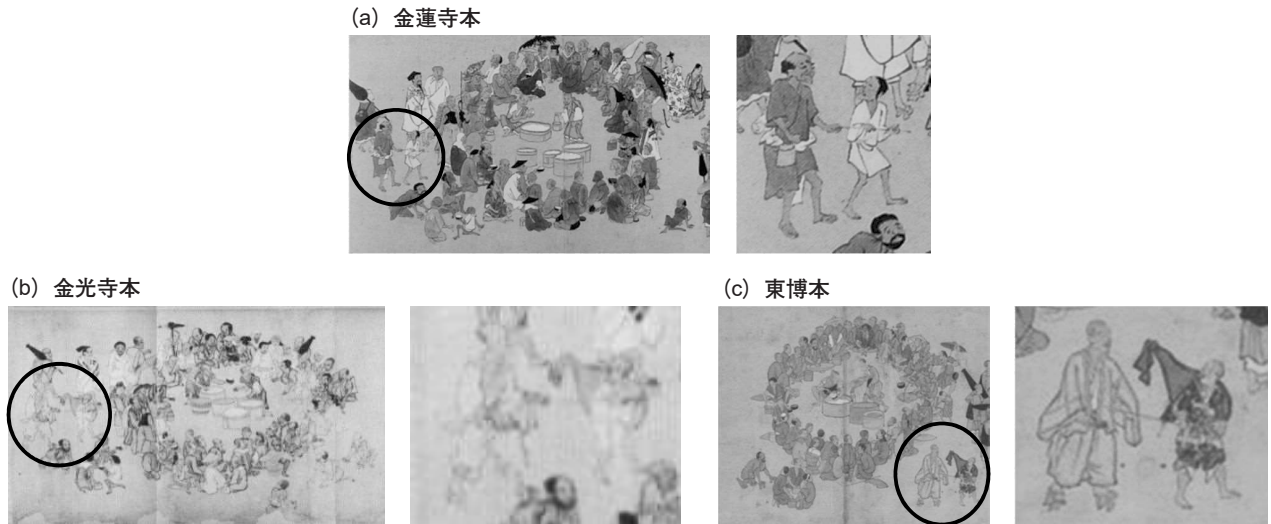


図2 《遊行上人縁起》諸本〈甚目寺施行〉にみる〔盲〕
〔盲〕と〔童〕は丸で囲み、〔盲〕と〔童〕の拡大像を右に示す。

d) が〔乞食非人の輪〕の右上に描かれているが、〔跛〕である可能性もある(表2)。

また金蓮寺本は〔乞食非人の輪〕の左側に〔盲乞食〕1人と〔童〕1人(図2a)、金光寺本は〔乞食非人の輪〕の左側に〔琵琶法師(=盲)]1人と〔童〕1人(図2b)、東博本は〔乞食非人の輪〕の右下に〔琵琶法師(=盲)]1人と〔童〕1人(図2c)が描かれており、〔盲〕と〔童〕の構図に類似性が認められる。もっとも〔盲〕の図様に関しては、金蓮寺本は〔盲乞食〕(図2a)が描かれているのに対し、金光寺本や東博本は〔琵琶法師〕(図2b、2c)が描かれている。すなわち祖本では〔盲乞食〕が描かれており、金蓮寺本は祖本に忠実な模写をはかったものの、金光寺本や東博本は〔盲乞食〕の〔琵琶法師〕への描き換えをはかった可能性も考えられる。

3 《聖徳太子絵伝》

3.1 《聖徳太子絵伝》諸本の系譜

『聖徳太子伝暦』⁽²⁾(藤原兼輔編、延喜17年(917年))は飛鳥時代より平安時代にわたって、さまざまな伝説や俗説を取り込みながら形成されてきた聖徳太子伝を収集整理したものであり、《聖徳太子絵伝》諸本は『聖徳太子伝暦』にみるさまざまな事蹟場面の絵画化をはかっている。《聖徳太子絵伝》諸本は織豊時代以前に描かれたと推定されている現存諸本に

限っても40本以上確認されており、現存最古本はかつて法隆寺東院絵殿に飾られ、現在は屏風形式になっている延久本とされている。

菊竹(1973)は〈聖徳太子の生誕前の説話〉や〈聖徳太子の誕生〉に始まり〈聖徳太子の薨後24年の事件〉に至る《聖徳太子絵伝》諸本の事蹟場面(約120件)の図様や構図を比較し、事蹟場面が自由に配置される傾向がある「古様」と、事蹟場面を年代順に配置する傾向がある「新様」に分類した。院政時代より鎌倉時代に描かれたものの大半は古様であるのに対し、新様諸本は鎌倉時代中葉より室町時代後葉に描かれたものの大半は新様である。また古様や新様の他に春夏秋冬の画幅にわけて事蹟場面を描く四季様もある。

さらに菊竹(1976)は《聖徳太子絵伝》諸本を、聖徳太子建立説話をもつ寺院に伝来する「南都系」と真宗系寺院に伝来する「真宗系」に分類した。一般的に南都系諸本の図様や構図には南都絵所の影響が色濃くみられるのに対し、真宗系諸本は本願寺系絵師の影響が窺われる(村松2012)。ただ真宗系にも拘わらず南都系と共通する図様や構図が窺えるものもあり、村松(2008:317)は南都系絵所と真宗系絵所が粉本を共有していた可能性を指摘している。

3.2 《聖徳太子絵伝》にみる〈無遮会〉

『聖徳太子伝暦』には「聖徳太子が25歳のとき法興

表3 《聖徳太子絵伝》諸本

諸本	所蔵	制作時期	寺院	図様	形式	〈無遮会〉
延久本 ⁽²¹⁾	東京国立博物館	院政時代(1069年)	南都	古様	屏風	第5・6面
大蔵寺本 ⁽²²⁾	大蔵寺	室町時代	南都	古様	掛幅	第1幅
広隆寺本 ⁽²³⁾	広隆寺	室町時代初葉	南都	新様	掛幅	第3幅
玉堂本 ⁽²⁴⁾	東京国立博物館	鎌倉時代～南北朝時代	南都	新様	掛幅	第2幅
談山本 ⁽²⁵⁾	談山神社	室町時代中葉	南都	新様	掛幅	第3幅
元享本 ⁽²⁶⁾	四天王寺	鎌倉時代(1323年)	南都	新様	掛幅	第3幅
堂本家本 ⁽²⁷⁾	堂本家	鎌倉時代(1324年)	南都		絵巻物	
橘寺本 ⁽²⁸⁾	橘寺	室町時代中葉	南都	新様	掛幅	第4幅
六角堂本 ⁽²⁹⁾	六角堂	室町時代中葉	南都	新様	掛幅	第3幅
嘉元本 ⁽³⁰⁾	東京国立博物館	鎌倉時代(1305年)	南都	四季	掛幅	第4幅
叡福寺本 ⁽³¹⁾	叡福寺	鎌倉時代～南北朝時代	南都	四季	掛幅	第7幅
斑鳩寺本 ⁽³²⁾	斑鳩寺	室町時代	南都	四季	掛幅	第4幅
妙安寺本 ⁽³³⁾	妙安寺	鎌倉時代～南北朝時代	真宗	古様	掛幅	第1幅
本證寺本 ⁽³⁴⁾	本證寺	鎌倉時代～南北朝時代	真宗	新様	掛幅	第5幅
本誓寺本 ⁽³⁵⁾	本誓寺	室町時代	真宗	新様	掛幅	第2幅
称名寺本 ⁽³⁶⁾	称名寺	室町時代	真宗	新様	掛幅	第3幅
勝鬘皇寺本 ⁽³⁷⁾	勝鬘皇寺	室町時代	真宗	新様	掛幅	第2幅
奈良博本 ⁽³⁸⁾	奈良国立博物館	室町時代中葉	真宗	新様	掛幅	第2幅
山楽本 ⁽³⁹⁾	四天王寺	江戸時代(1623年)	真宗		板絵	第7面

寺⁽⁶⁾が落慶し、そのとき無遮会を開いた」事蹟を紹介する行がある。

『聖徳太子伝暦』「二十五」冬十一月に有司啓すらく、法興寺造し畢んぬと。是の日慧慈・慧聰始て法興寺に住す。太子於天皇に奏して、无遮の會(無遮会)を設く(岡田1894)。

しかし〈無遮会〉に焦点をあてた論攷は他の事蹟場面に比べると少なく(太田1998、東京国立博物館2010、2014、五月女2016)、〈無遮会〉にみる[不具]描写の変遷に関する考察に至っては皆無に近い。

本稿では《聖徳太子絵伝》諸本より、南都系の延久本、嘉元本、斑鳩寺本、叡福寺本、広隆寺本、大

蔵寺本、元享本、玉堂本、六角堂本、談山本、山楽本、橘寺本、堂本家本の13本、真宗系の妙安寺本、本證寺本、奈良博本、勝鬘皇寺本、本誓寺本、称名寺本の6本を選択し(表3)、各本の〈無遮会〉にみる図様や構図を比較した。

南都系の嘉元本と斑鳩寺本のように親本/子本の関係にあるものや、粉本の利用が窺える延久本と橘寺本⁽⁷⁾の関係をふまえて、南都系と真宗系諸本〈無遮会〉の構図をみると、南都系諸本は俵から五穀を取り出して貧しい人々や乞食に配る人物たちとそれを眺める聖徳太子や公家たを描いた場面が〈無遮会〉の中心に置かれていることが窺われる。一方、真宗系諸本は念仏勧進をおこなう僧とそれを取り囲む公家や武士たちを描いた場面(図3)や、食物を並べ

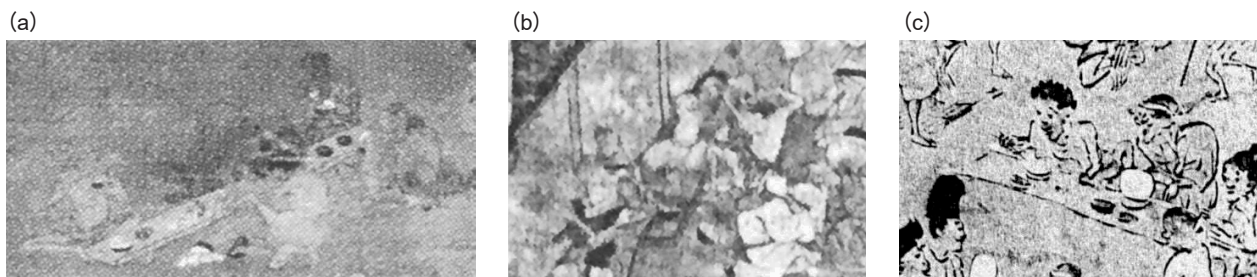


図3 《聖徳太子絵伝》諸本〈無遮会〉にみる食物を並べた細長い板の周りに坐って食している乞食たちの場面の類似性 (a) 本證寺本、(b) 本誓寺本、(c) 堂本家本。



図4 《聖徳太子絵伝》諸本〈無遮会〉と《融通念仏縁起絵》諸本〈念仏勧進開始〉にみる念仏勧進をおこなう僧とそれを取り囲む公家や武士たちの場面の類似性

(a) 本證寺本《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉、(b) 奈良博本《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉、(c) 暦応模本《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉。

た細長い板の周りに坐って食している乞食たちを描いた場面（図4）が見られ、このような場面は南都系諸本にはあまりみられない。

3.3 〈無遮会〉にみる〔不具〕描写

続いて各本〈無遮会〉にみる〔不具〕や〔犬神人〕を収集整理し比較をおこなった（表4）。南都系の叡福寺本には〔蹠A〕が1人（図5b）みえる。また談山本にも〔蹠〕1人（図5g）を認めることができる。しかし、この〔蹠〕は両手に蹠下駄をつけて、いわゆる体育座りをしており、膝当てをつけていないことより、四つ這いになって動くのではなく、仰向けになったまま動く〔蹠〕であるものと考えられた。このように描かれている〔蹠〕を〔蹠B〕とする。

また南都系の六角堂本に〔跛〕1人（図5f）認めることができる他、南都系の叡福寺本（図5b）や元享本（図5d）にも〔跛〕の可能性のある〔乞食〕が1人描かれている。しかし《遊行上人縁起絵》諸本と異なり、〔盲〕図像を認めることはできなかった。〔蹠A〕や〔蹠B〕は鎌倉時代中葉以降に制作されたものにみられるなど、概して《遊行上人縁起絵》に比べると〔不具〕描写が少ない傾向が窺われる。

一方〔犬神人〕は南都系の大蔵寺本（図5c）、元享本（図5d）、玉堂本（図5e）、六角堂本（図5f）に加えて、真宗系の妙安寺本（図5a）にも描かれており、〔蹠〕〔跛〕と同様に、鎌倉時代後葉以降のものに認められることが窺われた。（表4）。一方〔黒癩〕は図様に頼らざるを得ない面が大きいため確かなことは言えないものの、〔黒癩〕と思しき人物も山

表4 《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉にみる属性

諸本	蹠	跛	犬神人	黒癩
延久本				
嘉元本				
叡福寺本	1	1		
橋寺本			?	?
堂本家本			1	
広隆寺本				
元享本			2	
大蔵寺本			2	
玉堂本			2	
六角堂本		1	1	
談山本	1		2	?
妙安寺本			2	
本證寺本			1	?
奈良博本			1	?
本誓寺本				
勝鬘皇寺本				
山楽本				2?

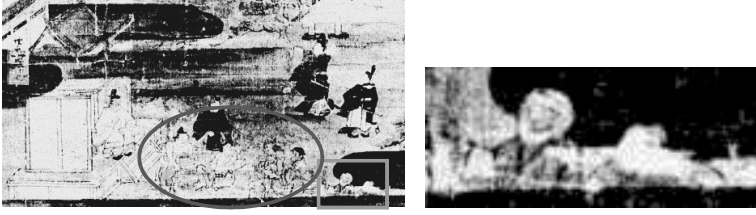
楽本（図5h）などにみられる。

4 《融通念仏縁起絵》

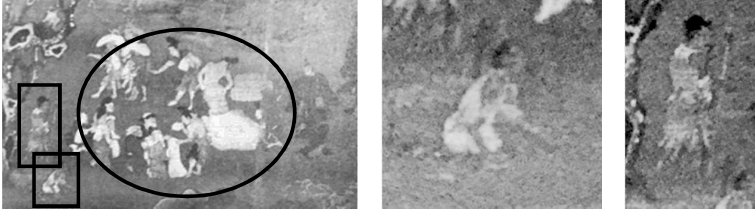
4.1 《融通念仏縁起絵》諸本の系譜

《融通念仏縁起絵》は融通念仏宗の開祖・良忍上人（1073-1132）の説話を絵画化したものであり、祖本（上下2巻、全17段）は鎌倉時代後葉の正和3年（1314年）に成立したものとみられている。南北朝時代には良鎮たち⁽⁸⁾により絵巻物の作成自体が念仏勧進に位置づけられ、全国各地への念仏勧進がはかられた（阿部 2013a）。特に永徳至徳期には数多くの

(a) 妙安寺本 (真宗系)



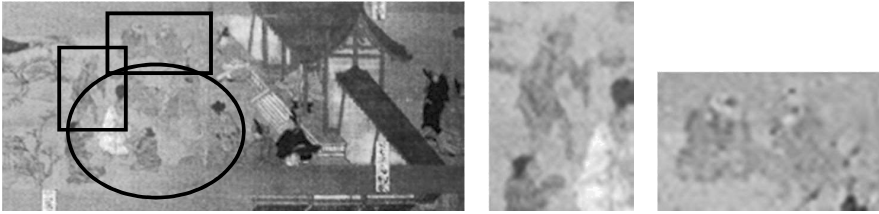
(b) 叡福寺本 (南都系)



(c) 大蔵寺本 (南都系)



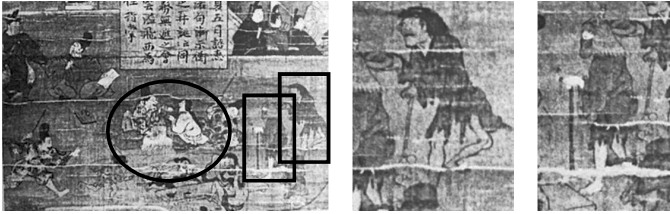
(d) 元享本 (南都系)



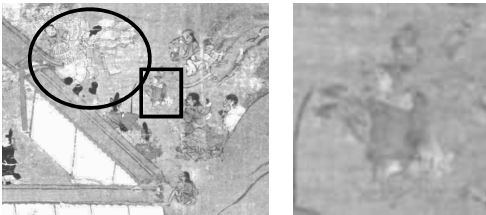
(e) 玉堂本 (南都系)



(f) 六角堂本 (南都系)



(g) 談山本 (南都系)



(h) 山楽本 (南都系)

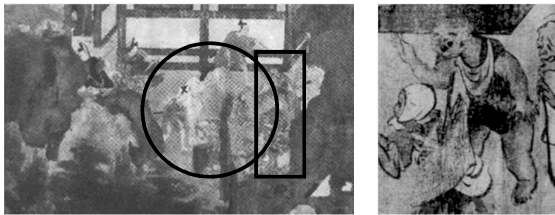


図5 《聖徳太子絵伝》諸本〈無遮会〉にみる〔蹠〕〔跛〕〔犬神人〕〔黒癩〕

俵から五穀を取り出して貧しい人々や乞食に配る人物群の場面は丸、〔蹠〕〔跛〕〔犬神人〕〔黒癩〕は四角で囲み、〔蹠〕〔跛〕〔犬神人〕〔黒癩〕の拡大像を右に示す。

《融通念仏縁起絵》写本（＝永徳至徳勸進諸本）が描かれ、明徳2年（1391年）には明徳版本が刊行された（阿部 2013b）。なお明徳版本を底本とし足利幕府関係者の結縁を得て、応永21年（1414年）清凉寺に奉納された肉筆本が清凉寺本である。

田代（1947）は30数本にのぼる現存諸本の図様と構図を「古様」と「新様」に分類すると共に、Chicago/Cleveland本を現存最古写本と位置づけた。一方、徳永（2012）は現存諸本のうち「古様」が最も色濃く窺われるのはFreer本であり、Chicago/Cleveland本は古様諸本の中では比較的遅い時期に制作されたものであると類推した⁽⁹⁾。しかし阿部（2018）は暦応模本の調査をふまえて徳永（2012）に反論すると共に、諸本の制作次期を時系列的に整理した⁽⁹⁾。本稿では田代（1947）と阿部（2018）が示した《融通念仏縁起絵》諸本の系譜にしたがい考察をおこなう。

4.2 《融通念仏縁起絵》にみる〈念仏勸進開始〉

《融通念仏縁起絵》上巻〈第3段念仏勸進開始〉は良忍が発案した名帳による念仏勸進が初めておこなわれる場面として《融通念仏縁起絵》の各場面の中でも重要視されており、詳細な図像学的考証がおこなわれてきた（阿部 2013c）。

暦応模本《融通念仏縁起絵》「上巻第3段詞」今この阿弥陀如来の告におとろきて、年来自力観念の功をすてゝ、ひとへに融通念仏勸進のころさしをこり、他力称名の行者となり給て、天治元年甲辰六月九日より始て、聚落にまははり、

上一人より下万民にいたるまで、道俗男女、貴賤老少相合にしたかひて、あまなくこれをすゝめ、その姓名を記録して、如来蔵にこれをおさむ。彼の一人の名字事なかければ本帳にゆつりてこれをとゝむるところなり（阿部 2018：261）。

〈第3段念仏勸進開始〉の右側には御所が描かれており、その中には上皇と女院の念仏結縁の姿がみえる。中央には良忍による念仏勸進の様子が描かれており、〈第3段念仏勸進開始〉の詞書にみる「道俗男女、貴賤老少相合にしたかひて」の様子が描かれている。〈第3段念仏勸進開始〉の左側には名帳に加入する高僧尊永や良忍がいる建物の他、この建物の方を向いている尼や童を従えた高僧は異時同図的に描かれている。この尼、高僧や童は良忍による念仏勸進の様子には含まれないものと判断した（図6a、6b、6c、6d、6f）。以下〈念仏勸進開始〉は〈第3段念仏勸進開始〉の中央場面を指すものとする。

本稿では阿部（2013a, b, c）に倣い、《融通念仏縁起絵》諸本よりChicago/Cleveland本、知恩院本、Freer本、聞名寺本、東博本、明徳版本の計6本を選択し（表5）、各本の〈念仏勸進開始〉にみる図様や構図を比較した（図6）。ただし暦応模本や東博模本はChicago/Cleveland本の模本ないし共通する底本による子本であり（阿部 2018）、本稿では暦応模本をChicago/Cleveland本の代替史料として用いた（表5）。なお清凉寺本は明徳版本を底本としていること、永徳至徳勸進諸本の根津美術館本や醍醐寺本は下巻のみであり〈念仏勸進開始〉がないことより、

表5 《融通念仏縁起絵》諸本

系	諸本	所蔵	制作時期・模写時期
正和本系	正和本	佚本	鎌倉時代（1314年）
	Chicago/Cleveland本	Chicago美術館（上巻） Cleveland美術館（下巻）	鎌倉時代（14世紀初葉）
	東博模本	東京国立博物館	江戸時代（1826年）
	暦応模本 ⁽⁴⁰⁾	大念仏寺	暦応本：南北朝時代（1342年） 暦応模本：江戸時代（1852年）
永徳至徳勸進諸本	知恩院本 ⁽⁴¹⁾	知恩院	南北朝時代（1382年）
	聞名寺本 ⁽⁴²⁾	聞名寺	南北朝時代
	Freer本 ⁽⁴³⁾	Freer美術館	南北朝時代（1384年）
	東博本 ⁽⁴⁴⁾	東京国立博物館	南北朝時代（1385年）
明徳版本系	明徳版本 ⁽⁴⁵⁾	大念仏寺など	南北朝時代（1391年）

(a) 暦応模本 (甲系)



(b) 聞名寺本 (甲系)



(c) 東博本 (甲系)



(d) 明德版 (甲系)



(e) 知恩院本 (乙系)



(f) Freer 本 (乙系)



図6 《融通念仏縁起絵》諸本にみる〈念仏勧進開始〉
〔3人の賤民〕を丸で囲む。

本稿では扱わないことにした。

阿部 (2013c) は〈念仏勧進開始〉にみる〔3人の賤民〕に焦点をあて、結縁における〔3人の賤民〕の他者性を論じた(本稿執筆者註:〔3人の賤民〕という句は阿部 (2013c) に倣っている)。本稿ではこの〔3人の賤民〕に焦点をあて、〔3人の賤民〕が描かれている甲系(暦応模本、聞名寺本、東博本、明德版本)と、〔3人の賤民〕が描かれていない乙系(知恩院本、Freer 本)に分け(表5)、暦応模本(図6a)、聞名寺本(図6b)、東博本(図6c)、明德版本(図6d)および知恩院本(図6e)、Freer 本(図6f)を系列および制作時期に準じて並べた。

続いて諸本の〈念仏勧進開始〉に描かれている人物の属性を整理した(表6)⁽¹⁰⁾。聞名寺本にみる老

乞食⁽¹⁰⁾ および童乞食⁽¹⁰⁾ は〔翁〕と〔跛〕に分類した(表6)。また明德版本にみる〔乞食〕は赤児を背負った女乞食であるものの、表6では1名とした。ちなみに赤児を背負った女乞食は《遊行上人縁起絵》諸本〈甚目寺施行〉や《聖徳太子絵伝》諸本〈無遮会〉にも多く描かれており、〔職能民〕〔乞食〕〔不具〕〔犬神人〕などにより構成される〔賤〕空間における重要な構成要素であることが窺われる。

暦応模本では〔良忍〕の左側に〔尼〕1名〔公家男〕1名、右側に〔公家女〕2名が配置されているものの、〔武士〕や〔僧〕はみられない(図5a)。一方、暦応模本を除く甲系の聞名寺本、東博本、明德版本は、良忍の左側に〔武士〕2名、〔公家男〕1名、右側に〔公家女〕2名、〔尼〕1名を描いてお

表6 《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉にみる属性

諸本	系	公家男	公家女	僧	尼	武士	童	翁	芸能人	瞽女	乞食	躰	跛	犬神人	計
暦応模本	甲	1	2		1				3						7
聞名寺本	甲	1	2		1	2		1	5				1		13
東博本	甲	1	2		1	2			4					2	12
知恩院本	乙	1	1	1	1	1	1		2		2	1			11
Freer 本	乙	1	2	1	1	1	1		4		1	1			13
明德版本	甲	1	2		1	3			8	2	1	2		2	24

り、図様や構図に類似性が認められる(図6b、6c、6d、表6)。一方、乙系の知恩院本とFreer本は、良忍の左側に〔武士〕1名、〔公家女〕1~2名、〔公家男〕1名、〔童〕1名、右側に〔僧〕1名、〔尼〕1名を描いており、それぞれの図様や構図に類似性が認められる(図6e、6f、表6)。このように甲系諸本ないし乙系諸本にみる〔公家男〕〔公家女〕〔僧〕〔尼〕〔武士〕の人数、図様や構図には共通性や継承性がみられる。すなわち〔良忍〕〔公家男〕〔公家女〕〔僧〕〔尼〕〔武士〕により構成される〔貴〕空間は定型化しており、Chicago/Cleveland本や永徳至徳勸

進諸本において大きな変化は起きなかったものと考えられる(図7a、7b、7c)。

一方、諸本〈念仏勧進開始〉では〔貴〕空間の下に〔職能民〕〔乞食〕〔不具〕〔犬神人〕により構成される〔賤〕空間が配置され、〔貴〕空間と〔賤〕空間の間には〔境界〕が構築されている(図6)。ただFreer本(図6e)では〔良忍〕のすぐ手前に〔職能民〕が描かれている他、明德版本(図6f)では〔職能民〕が〔貴〕空間に隣り合う形で描かれているなど、〔貴〕空間と〔賤〕空間の〔境界〕の揺らぎもみられる。

(a) 暦応模本〔貴〕空間



(b) 知恩院本〔貴〕空間



(c) Freer 本〔貴〕空間



(d) 暦応模本〔賤〕空間



(e) 知恩院本〔賤〕空間



(f) Freer 本〔賤〕空間



図7 《融通念仏縁起絵》諸本〈念仏勧進開始〉にみる〔貴〕空間と〔賤〕空間

特に乙系の知恩院本と Freer 本は〈念仏勧進開始〉の〔貴〕空間に高い類似性がみられるにも拘わらず、それぞれの〔賤〕空間（図7e、7f）の図様や構図には類似性がほとんど認められない。例えば知恩院本は〔暮露〕〔鉢叩〕〔漁師〕⁽¹⁰⁾（図7e）が描かれている。しかし Freer 本は〔猿回し〕〔山伏〕〔遊行行者〕⁽¹⁰⁾（図7f）が描かれており、知恩院本と Freer 本それぞれに描かれている〔職能民〕の属性に共通点を窺うことはできない。また〔職能民〕や〔乞食〕の構図にも共通点はみられない。

甲系の暦応模本は〔3人の賤民〕のみが描かれているものの、甲系の聞名寺本（図6b）や東博本（図6c）では〔職能民〕〔乞食〕〔不具〕〔犬神人〕の描写が増えるなど、〔賤〕空間の拡大がみられるようになる。しかし甲系諸本にみる〔賤〕空間の図様や構図も一様ではない。すなわち諸本にみる〔貴〕空間が定型化しているのに対し、〔賤〕空間は定型化していない傾向が窺われる。

黒田（1986c：150）は「当時の模写は模写画家の作為ないし創意が加わる場合が多く添景の増加や人物等の配置がえなどがなされた」可能性に言及している。このような加筆や描き換えは〈念仏勧進開始〉の〔賤〕空間（図7）だけでなく《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉の〔盲〕図像にもみられる。当時の絵所においては〔職能民〕や〔不具〕の図像に関する粉本が必ずしも行き渡っておらず、個々の絵師たちの認識が〔賤〕空間を構成する〔職能民〕〔乞食〕や〔不具〕の描写に反映される土壌があったものと考えられる。

4.3 〈念仏勧進開始〉にみる〔不具〕描写

諸本〈念仏勧進開始〉の〔賤〕空間にみる〔不具〕には〔躰〕〔跛〕〔瞽女〕が認められる（表6）。なお〔躰〕や〔跛〕も〔乞食〕に含み得るものの、本稿では〔不具〕ではない乞食を〔乞食〕に分類し、明らかに〔不具〕である乞食を〔躰〕や〔跛〕に分類した。〔瞽女〕は〔職能民〕に分類できるものの〔盲〕にも分類できることより、〔職能民〕とは別に〔瞽女〕として分類した。

乙系の知恩院本および Freer 本はそれぞれ〔賤〕空間の中央に〔躰 A〕が1人描かれており（図8b、

8c）、明德版本は〔賤〕空間に〔躰 A〕1人、〔躰 B〕1人が描かれている（図8e）。

また明德版本には〔瞽女〕1人と〔小瞽女〕1人が描かれている（図9a）。〔瞽女〕は三味線の印象が強いものの、中世日本の〔瞽女〕は鼓を用いており（服藤2012）、それは《職人歌合》に描かれている瞽女からも窺うことができる（図9b）。

一方〔犬神人〕は甲系の東博本（図8d）や明德版本（図8e）にみえる。永徳至徳勧進諸本のうち〔躰 A〕は前期に制作された知恩院本や聞名寺本にみえるのに対し、〔犬神人〕は永徳至徳後期に制作された東博本からみえるようになることより、永徳至徳勧進諸本においては、〔躰〕（＝〔躰 A〕）や〔跛〕が〔賤〕空間に描かれ、その後〔犬神人〕が加えられたものと見なすこともできよう。

5 不具描写の変遷

5.1 〔不具〕の図像学的課題

黒田（1986a）は歴史図像学を提唱するにあたり、非文字史料と文字史料の整合的把握の必要性を述べており、津田（2018）も非文字史料のみに依拠した論攷における陥穽を指摘している。

絵画史料の解釈にあたっては、文献史料およびそこから得られた所説との緊張関係を明確にし、両者の整合的な理解・解釈をめぐすべきだということである。（黒田1986a：73）

図様の古様さだけを根拠にして制作時期を判断することの難しさ・危うさの一端がそこには示されている。絵巻における制作年代を検討してゆくうえで、その推定に客観性をもたせるためにも、あわせてこれにともなう詞書の執筆者を確定してゆく作業はやはり避けて通ることはできない。（津田2018：429）

本稿では《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉、《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉や《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉にみる〔不具〕、〔犬神人〕や〔黒癩〕図像の収集整理をはかったものの、文字史料との整合的

(a) 聞名寺本（甲系）



(b) 知恩院本（乙系）



(c) Freer 本（乙系）



(d) 東博本（甲系）



(e) 明德版（甲系）



図8 《融通念仏縁起絵》諸本の〈念仏勧進開始〉にみる〔覽〕と〔犬神人〕

〔覽〕は丸、〔犬神人〕は四角、〔乞食〕は三角で囲み、〔覽〕〔犬神人〕の拡大像を右に示す。

(a)



(b)



図9 (a) 明德版本《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉にみる〔盲（瞽女）〕 (b) 東博模本《七十一番職人歌合》第25番〈女盲〉〈琵琶法師〉

〔盲（瞽女）〕2名は丸で囲み、〔瞽女〕の拡大像を右に示す。（東博模本《七十一番職人歌合》狩野晴川・狩野勝川（模）東京国立博物館画像検索 <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0017472>（2020年10月20日））

的把握に関しては多くの課題が残った。

例えば《遊行上人縁起絵》との連関性が指摘されている文字史料『一遍義集』や『一遍上人年譜略』には「非人施行」に関する記述がある。

『一遍義集』同三年秋比九州豊後國府修業。歸伏道俗隨逐貴賤、不可勝計。其中或受念佛札歸私宅者アリ、或聞稱名勸望隨逐人モアリ進退任縁更貴賤不論。爰以多者聾盲瘡癩類、黑白癩病族、此等非人會雖無佛法之志、強因思施食殘東西集南北追來（時宗宗典編集委員会 1974）。

『一遍上人年譜略』丙子条建治二丙子同世八歳、今春出熊野山。任神敕而巡行諸國賦算化益。三月下旬、至豫州度親類眷屬并國中。次移九州、謁聖達和尚。達大喜怡。信神敕旨、拜受札矣。次詣大隅正八幡宮、念佛法樂、謝神恩。神以十言葉和歌、示傳一氣十念旨。自爾我宗有一氣十念傳。勸進國中、至豊後州。道俗隨逐、貴賤供養不可勝計。又聾盲瘡癩人乞匄等、爲受供養餘飯隨從。師哀之利化（時宗宗典編集委員会 1979）。

上記の文字史料には「聾盲瘡癩人乞匄」や「聾盲瘡癩類、黑白癩病族」という行がみられるものの、「蹠」「跛」はない。しかし《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉には多くの「蹠」や「跛」が描かれており、『一遍上人年譜略』や『一遍義集』のような文字史料に「蹠」や「跛」の図像の整合的根拠を求めることは難しいことが窺われる。『一遍義集』や『一遍上人年譜略』には「聾」や「瘡癩」⁽¹¹⁾がみえるものの、《遊行上人縁起絵》諸本に「聾」ないし「瘡癩」と特定できるような図像を認めることはできない。

また「蹠」図像のように身体描写のみで判断し得るだけでなく「蹠下駄」のような属性標識がある「不具」もあるものの、「跛」図像のように「不具ではない乞食」なのか、それとも「跛」である乞食」なのか判断に迷う例も少なくない。実際、六角堂本《聖徳太子絵伝》にみる「跛」(図5i)は左足の描写より「跛」であると判断できるものの、光明寺本《遊行上人縁起絵》(図1d)、叡福寺本《聖徳太子絵伝》

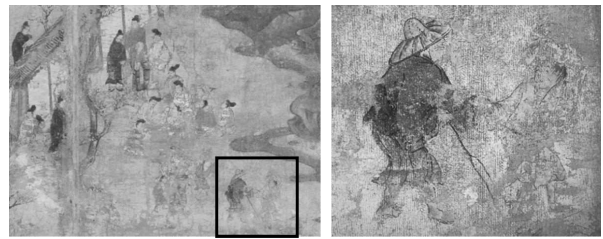


図10 延久本《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉にみる〔僧〕〔僧〕と〔童〕は四角で囲み、〔僧〕と〔童〕の拡大像を右に示す。

(図5d)や元享本《聖徳太子絵伝》(図5g)に描かれている「乞食」は杖や人物の姿勢だけでは判断できない。

〔盲〕の場合、〔琵琶法師〕や〔瞽女〕は〔琵琶〕や〔鼓〕のような〔盲〕の属性標識により特定できる他、〔童〕に手を引かれている図様により傍証的に判断し得る(石井 1997)。もっとも東京国立博物館(2010:26)は延久本《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉にみる〔僧〕(図10)を「僧は鼠衣に笠を被り右手に杖を持つ。僧は鼠衣に笠を被り、鹿背杖をつく。童子は淡黄に小さな赤い花文を散らした小袖を着て、右手で僧の手を引き、左手で頭上の荷物を支える」と説明しているものの、この〔僧〕は〔盲〕なのか判断に苦しむ。延久本《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉にみる〔僧〕(図10)の図様や構図は《遊行上人縁起絵》諸本〈甚目寺施行〉にみる〔盲〕と〔童〕(図2)の図様や構図に似ている。しかし童に手を引かれながら歩く翁は中世絵巻物では普通にみられる他、〔僧〕が持っている鹿背杖も童に手を引かれながら歩く翁が持つ杖として普通にみられるだけに〔盲〕の属性標識にはなり得ない。すなわち〔盲〕図像の特定もけっして簡単ではないことが窺われる。

〔犬神人〕の場合は白い覆面や柿色の衣服より特定が可能ではあるものの、六角堂本《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉にみる〔犬神人〕(図5i)のような描写もみられる。また〔黒癩〕は図様(e.g. つぶれた顔など)や色相(e.g. 黒い肌)より類推せざるを得ない場合が多く、非文字資料のみに依拠して〔黒癩〕を特定していくことの難しさが窺える。

5.2 〔不具〕にみる多様性と動態性

《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉、《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉や《融通念仏縁起絵》〈念仏勸進開始〉に

みる〔不具〕の中では〔躰〕（＝〔躰A〕〔躰B〕）が最も多く認められる。また金光寺本《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉（図1b）や明德版本《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉（図8e）には〔躰A〕と〔躰B〕の両方が描かれている他、光明寺本《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉（図1d）や叡福寺本《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉（図5d）には〔躰A〕と〔跛〕の両方が描かれている。すなわち《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉、《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉や《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉に関する限り、〔不具〕は〔躰〕や〔跛〕が〔躰A〕に定型化事象が起きたわけではないことが窺われる。

明德版本《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉にみる〔躰A〕（図8e）は四つ這いで歩いている動作を捉えた描写になっている他、Freer本《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉にみる〔躰A〕（図8c）は躰下駄を脱いだ左手で念仏を唱える仕草が描かれている。軽業的な動作の下に描かれている〔職能民〕と同じように、〔躰A〕は細かい動きの下に描写されており、〔躰〕には非定型化に加えて動態性の顕現化が窺われ、定型化がみられる〔貴〕空間と際立った非対称性を示している。

なお聞名寺本《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉にみる〔職能民〕の軽業的な動作の描写に念仏踊りとの連関性を汲み取る論考もある（船田2017）。このように定型化し動態的な描写がみられない〔貴〕空間に対し、〔賤〕空間は念仏踊りなどの連関性を示唆する動態性に満ちており、江戸時代初葉に描かれた《豊国祭礼図屏風》〈方広寺施行〉にみる〔職能民〕〔乞食〕〔瘡痍〕の動態的な描写に連なっているとみなすこともできる（末森ほか2016）。

5.3 〔乞食〕と〔不具〕の階層性

加藤（1978：60）は奈良時代や平安時代初葉にみる穢れ意識を論じ、「障害や疾病に対する古代人の基本的な観念は、これを「穢れ」とする思想であった」と論じている。もっとも黒田（1986b：148）は《遊行上人縁起絵》諸本〈甚目寺施行〉に描かれている〔乞食非人の輪〕（図1）にみる乞食非人と不具の共食関係⁵⁾に注目し、原田（2020：217）も円座（＝〔乞食非人の輪〕）自体が同じ身分に属する人々の共

食の輪であることは疑い得ないとしている。

しかし《遊行上人縁起絵》諸本〈甚目寺施行〉にみる〔躰〕（図1）や〔盲〕（図2）は、いずれも〔乞食非人の輪〕の周縁（＝外）に描かれており、まったく同じ円座に描かれているわけではない。〔躰〕や〔盲〕が〔乞食非人の輪〕の周縁（＝外）に描かれていることについては、〔不具ではない乞食〕と〔不具〕は階層性のない共食関係にあるものの、〔乞食非人の輪〕に〔不具〕もいることを強調すべく、〔不具〕の視認性を高めるために〔躰〕や〔盲〕を〔乞食非人の輪〕の外側に描いただけにすぎないという解釈もできる。しかし《遊行上人縁起絵》諸本〈甚目寺施行〉に〔一遍と側近〕〔乞食僧〕〔乞食非人〕〔犬神人〕の階層関係がはっきり描かれていることより、〔不具ではない乞食〕と〔不具〕の間には序列関係があり、〔不具ではない乞食〕と〔不具〕の序列関係を可視化すべく、〔躰〕や〔盲〕を〔乞食非人の輪〕の外側に描いたとみなすのが妥当であろう。ただ時宗関係者が〔不具ではない乞食〕と〔不具〕の間の序列関係は好ましいことではないと考え、〔躰〕や〔盲〕を〔乞食非人の輪〕の外側に描いて視認性を高めることにより、〔不具ではない乞食〕と〔不具〕の共食関係を強調したとみなすこともできる。

〔乞食〕と〔不具〕にみる序列関係は《聖徳太子絵伝》諸本〈無遮会〉にも窺うことができる（図5）。例えば《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉の場合、南北朝時代の叡福寺本（図5d）や室町時代中葉の六角堂本（図5i）では〔躰〕〔跛〕や〔犬神人〕は俵から五穀を取り出して貧しい人々と乞食に配る人物たちの周縁に描かれており、《遊行上人縁起絵》諸本〈甚目寺施行〉にみる〔乞食非人の輪〕と〔躰〕の構図によく似ている。

しかし室町時代後葉の談山本〈無遮会〉（図5j）では〔躰〕は五穀を受け取る貧しい人々と乞食と同じ円座の中に描かれている他、織豊時代に描かれた山楽本〈無遮会〉（図5q）では〔黒癩〕が直接施しを受けている。このような〔乞食〕と〔不具〕の構図にみる通時的変化は、室町時代に〔乞食〕と〔不具〕の階層関係の変化を反映しているものとも考えられる。

一方《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉にみる〔乞食〕と〔不具〕の構図（図8）は《遊行上人縁起

絵〈甚目寺施行〉や《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉にみる〔乞食〕と〔不具〕の構図とは様相が異なる。例えば知恩院本(図8b)やFreer本(図8c)では〔躰〕が〔賤〕空間において端のほうに描かれることなく、むしろ中央に描かれている。〔職能民〕〔乞食〕〔不具〕の序列関係を窺うことができない〔賤〕空間の構図には、融通念仏宗関係者の「念仏勧進における触穢に〔職能民〕〔乞食〕〔不具〕〔犬神人〕の序列関係を持ち込まない」という意図を汲み取ることもできよう⁽¹²⁾。

5.4 〔不具〕と〔犬神人〕の階層性

《融通念仏縁起絵》諸本〈甚目寺施行〉にみるように、〔乞食非人の輪〕と〔犬神人の輪〕が分けられ、〔犬神人の輪〕が〔乞食非人の輪〕よりも寺から離れた位置にある構図は〔不具〕が〔犬神人〕を差別する階層関係を端的に示しており、そのような例は『今昔物語集』の「比叡山の僧心懐、嫉妬によりて現報を感じたる語」にもみられる(黒田1986b:241)。

しかし《融通念仏縁起絵》諸本〈念仏勧進開始〉の〔不具〕と〔犬神人〕をみると、永徳至徳勧進諸本の初期にあたる聞名寺本(図8a)、知恩院本(図8b) Freer本(図8c)では〔不具〕しか描かれていないものの、後期の東博本(図8d)では〔犬神人〕が描かれており、永徳至徳勧進諸本の流れを継ぐ明德版本(図8e)では〔不具〕と〔犬神人〕の両方が描かれている。

すなわち中世日本においては仏教思想および穢れ認識により、〔犬神人〕のほうが〔不具〕よりもより忌むべきものとして認識されており、勧進の対象が〔貴〕空間に示されるような属性(e.g. 公家や武士)から〔賤〕空間に属する属性(e.g. 職能民、不具、犬神人)にも拡げていく過程で、当初は念仏踊りにも深い関わりのある〔職能民〕、その次は〔乞食〕や〔不具〕、そして最後は〔犬神人〕を《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉に描き加えていくような類推過程は、中世賤民にみる階層性を反映しているものとも考えられよう。

5.5 聾啞表象の不可視性

『一遍義集』には「聾盲瘖瘂類、黑白癩病族」、『一

遍上人年譜略』には「聾盲瘖瘂癩人乞匄」と書かれており、「聾」や「瘖瘂」のを認めることができる。また光明寺本《融通念仏縁起絵》「第3巻第1段詞書」にも「聾」の字がみえる。

《光明寺本・遊行上人縁起絵》「第3巻第1段詞書」耳の辺のことの葉ハ、聾てきく声そなき。

しかし《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉(図1、図2)に〔聾〕ないし〔瘖瘂〕と判断し得る図像を認めることはむずかしい。

田上(1994:106)は鎌倉時代に勃興した鎌倉新仏教を始めとする中世日本の仏教思想では、「瘖瘂」は念仏を唱えることができないことより信者集団から排除されがちであったと述べている。すなわち中世日本の仏教思想には、「瘖瘂」は声を出して念仏を唱えることができないため、救済ないし触穢による聖の創出の対象とはみなさなかつた傾向が強くみられ、このあたりが〔躰〕や〔盲〕と大きく異なる。このような「瘖瘂」に対する認識にしたがい、《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉には〔瘖瘂〕は描かれなかったのであろうか。

〔聾〕や〔瘖瘂〕は〔躰〕〔跛〕〔盲〕と異なり、外見だけでは〔不具〕であることがわからないという特性を持ち、必然的に〔聾〕や〔瘖瘂〕は不可視性を帯びざるを得ない。ただ中世日本の常識では容易に判別し得る〔聾〕や〔瘖瘂〕の属性標識があり、中世日本絵画史料にも反映されている可能性は残る。また絵巻物や屏風絵、掛幅を用いた講釈や説話で〔聾〕や〔瘖瘂〕図像についても何らかの説明があった可能性もある。

もっとも時宗関連史料は〔瘖瘂〕も救済の対象になり得ると解釈し得るような記述もあることが知られている(田上1994:108)。改めて《遊行上人縁起絵》諸本〈甚目寺施行〉を対照すると、金蓮寺本(図11a)、金光寺本(図11b)、東博本(図11c)、真光寺本(図11e)の〈甚目寺施行〉にみる〔乞食非人の輪〕の周縁には〔躰〕や〔盲〕の他に〔3人の輪〕が描かれていることが窺われる。不具の典型的な例として「躰跛」、「盲」と「聾啞」の3例が挙げられることが多いことを踏まえ、〔躰〕と〔盲〕が〔乞食

(a) 金蓮寺本



(b) 金光寺本



(c) 東博本



(d) 光明寺本



(e) 真光寺本



図11 《遊行上人縁起》諸本〈甚目寺施行〉にみる〔3人の輪〕

〔3人の輪〕は丸で囲み、〔3人の輪〕の拡大像を右に示す。

非人の輪〕の外側に描かれていることより、〔乞食非人の輪〕の外側に描かれている〔3人の輪〕は〔瘡瘡〕であると類推することもできる。なお〔3人の輪〕は久松本《天狗草紙》〈施行〉にみる〔2人の乞食と1人の犬神人による輪〕(図12)にもみることができ。〔3人の輪〕にどのような属性を投影するのは、《遊行上人縁起絵》を制作した人や《遊行上人縁起絵》を鑑賞する人たちの主観に委ねられたのか

もしれない。

さらに金蓮寺本〔3人の輪〕(図11a)にみる3人のうち、上に描かれている乞食は口を閉じ、両手を前に出して御飯を乞うような仕草をみせている(図13a)。このような仕草をみせている人物は〔乞食非人の輪〕に描かれている人物の中では乞食尼(図13b)のみである。なお〔乞食非人の輪〕に描かれている人物の中には口を開けている図像も多くみられる。

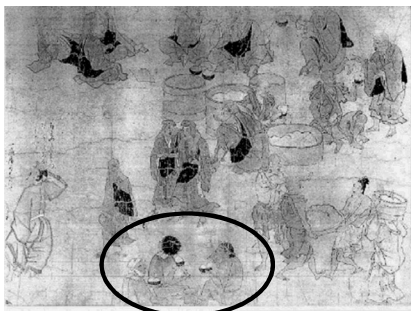


図12 久松本《天狗草紙》〈施行〉にみる〔2人の乞食と1人の犬神人〕

〔2人の乞食と1人の犬神人〕を楕円で囲む。(久松本《天狗草紙》前田育徳財団編1933『天狗草紙：解説付前田育徳会本』前田育徳財団)

(a)



(b)



(c)



図13 《遊行上人縁起絵》諸本〈甚目寺施行〉にみる〔3人の輪〕の中の人物の仕草

(a) 金蓮寺本《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉〔3人の輪〕の中の1人、(b) 金蓮寺本《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉〔乞食非人の輪〕の中にいる尼、(c) 金光寺本《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉〔3人の輪〕の中の1人。

すなわち口を閉じながら物を乞う仕草をみせる人物を「乞食非人の輪」の中でただ一人描くことにより、間接的に「瘡痍」であることを示した可能性もある。一方、金光寺本「3人の輪」(図11b)において図13aに該当する乞食(図13c)は左手に御飯を持っている図様が変わっており、東博では該当する乞食(図11c)には両手を前に出すような仕草の描写はみられない。ここに「瘡痍」の不可視性ゆえに「瘡痍」を前景化する意図が継承されにくい「瘡痍」の特性を窺うこともできるが、文字史料との整合的把握に課題が残る。同様に、末森・高橋(2017)は《一遍聖絵》に「瘡痍」の可能性のある「椀を叩く乞食」がみえることを指摘しているものの、やはり文字史料との整合的把握に大きな課題を抱えている。

5.6 中世西欧絵画にみる不具描写と聾啞表象

院政時代、鎌倉時代、室町時代(13世紀~16世紀)にかけて制作された《遊行上人縁起絵》〈甚目寺施行〉、《聖徳太子絵伝》〈無遮会〉や《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉にみる「不具」の構図には、乞食と不具の序列関係や「瘡痍」の不可視性が窺われ

た。同時期の西欧絵画史料にみる「不具」の構図にも同じような事象がみられるのであろうか。

14世紀に制作された『Romance of Alexander』⁽¹³⁾を始めとする中世西欧写本の挿絵には多くの「不具」が描かれている。『Romance of Alexander』も余白に描かれている挿絵の中に「躄」[跛](図14a)や「盲」(図14b、14c)を認めることができる。しかし「聾」や「瘡痍」を認めることはできず、中世西欧写本の挿絵においても「聾」や「瘡痍」が不可視化されている傾向が窺われる(Saint-Loup 1993、末森・高橋2016)。

16世紀のPieter Bruegel the elder(1525-1569)は数多くの「不具」を描いたことで知られている。しかしBruegel the elderが描いた「不具」は「躄跛」や「盲」に限られており、「聾」や「瘡痍」を描いたものはない(末森・高橋2016)。ただPieter Bruegel the elderと同時代に活躍したHotenberg(1535-1590)の《四旬節と謝肉祭 Lent and Carnival》⁽¹⁴⁾(図15a)は1558年に描かれているものの、「躄跛」は画面中央部の奥のほうに小さく描かれている。しかしBruegel the elderの《謝肉祭と四旬節の喧嘩 The Fighting of



図14 『Romance of Alexander』挿絵にみる「躄」[跛]「盲」
(a) Three cripples fighting. 109r. (b) Blind men misled. 74v. (c) Blind man and dog. 77v.

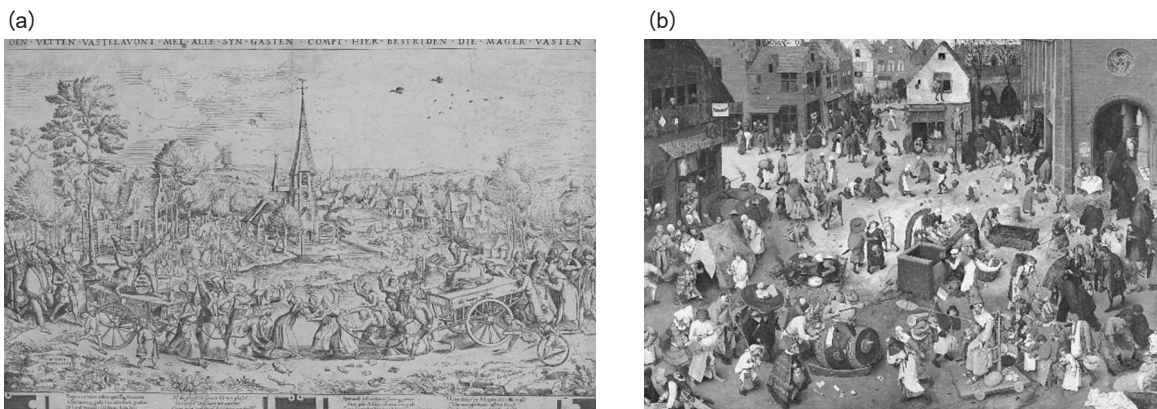


図15 中世西欧絵画にみる「不具」
(a) Lent and Carnival. (b) The Fight between Carnival and Lent.

Carnival and Lent》⁽¹⁵⁾ (図15b) は1559年に描かれており、[蹠跛] は [不具ではない人物] と同じ大きさで描かれている他、[盲] や [癡] ないし [癡狂] と思しき人物も描かれている。両者の絵画にみる [蹠跛] の相違は両画家の視座の相違が投影されたものと考えられ、このような見解は中世日本絵画史料にみる [不具] 描写にも共通するものがある。

奥田 (2015) は Brugel the elder の作品にみる不具描写を穢れと社会的結合性という視点より論じたものの、中世日本絵画史料にみる [不具] と中世西欧絵画史料にみる [不具] の対照はおこなっていない。もっとも中世西欧絵画史料にみる良俗と中世日本絵画史料にみる聖賤は似て非なる概念認識であり、中世西欧絵画にみる構図は「神-市民-周縁領域」(奥田 2015) であるのに対し、中世日本絵画にみる構図は「聖-賤」であり、「賤」が「聖」になり、「聖」が「賤」になり得るという二重性 (船田 2017) をはらむという相違を看過すべきではない。

6 おわりに

14世紀初葉に描かれた正和祖本《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉には [賤] を代表する図像として [職能民] のみが描かれており、[乞食] [不具] [犬神人] は描かれていない (図7d)。しかし14世紀後葉の永徳至徳勧進諸本において [賤] の描写に [職能民] 以外にも [乞食] [蹠跛] [盲] が加えられるようになったのみならず、[職能民] 以外にも [乞食] [蹠跛] [盲] の階層性を内包した構図にも変化が生じ、念仏勧進の対象範囲が広がっていくと共に、[公家] [僧] [武士] により構成する [貴] 空間と [職能民] [乞食] [不具] [犬神人] により構成する [賤] 空間に関する認識も変容してきたことが窺われる⁽¹¹⁾。とりわけ明徳版本《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉の [賤] 空間には [蹠A] [蹠B] [盲] [犬神人] が [職能民] と同じ円座の下に描かれており、[賤] 空間と [貴] 空間の境界も知恩院本や Freer 本に比べても、中世日本仏教にみる触穢と聖の思想にみる [賤] と [貴] の二重性を示唆するかのよう曖昧なものに変化しており、念仏勧進における触穢の一元化を窺わせるものがあり、この点において

も明徳版本《融通念仏縁起絵》〈念仏勧進開始〉を中世絵巻物にみる [賤] 空間の描写における一つの到達点と位置づけることもできる。

ただ中世日本絵画史料にみる [不具] の変化は [不具] にみる属性の多様化ではなく、「蹠」[跛] [盲] の図様や構図の多様化を意味しており、そこには中世日本仏教にみる触穢と聖の思想 (阿部 2017) や不具の世界における階層関係、不具と犬神人の階層関係の影響の下に、絵巻物や掛幅の制作に係わった絵所の絵師たち個々の不具や犬神人に対する認識が [不具] や [犬神人] の図様や構図にも反映されているものと考えられる。一方、文字史料には「聾」や「瘖瘂」が普通にみられるにも拘わらず、中世日本絵画史料では [聾] [瘖瘂] が認められないことも窺われ、非文字史料にみる [不具] が内包する顕性的ないし潜性的図像といった [不具] にみる特性の違いも窺われる。

このように中世日本絵画史料にみる [賤] 空間における [職能民] [不具ではない乞食] [不具] [犬神人] の階層関係が院政時代、鎌倉時代より南北朝時代、室町時代を経て織豊時代に至るまでの間に変化していく様相を可視化し得るあたりに、歴史図像学と障害史の接点を求めることもできよう。

註

- (1) 賤民は古代 (古墳時代、飛鳥時代、奈良時代)、中古 (平安時代、院政時代)、中世 (鎌倉時代、室町時代、織豊時代) により意味合いが大きく変化している。本稿では主に中世日本の仏教思想に基づく賤民という意味合いで「賤民」と言う用語を用いる。具体的には [職能民] [乞食] [不具] [犬神人 (=癡)] といった人々を指す。
- (2) 本稿では絵画史料の標題は二重山括弧《》、絵画史料の段や場面の名称は山括弧〈〉、絵画史料のみにみる図像、図像の属性、場面の具体的な描写は角括弧 []、文字史料の標題は二重鉤括弧『』、文字史料の章名は鉤括弧「」で囲むものとする。絵画史料および文字史料の影印に関する書誌情報は参考文献の後に示す。
- (3) 《甲系統》真光寺本、金蓮寺本、清浄光寺本、金光寺本、大和文華館本、《乙系統》古縁起本、光明寺本、逸翁美術館本、《丙系統》金台寺本、常称寺本、遠山家本 (宮 1979)。
- (4) かつて佛光寺本《親鸞伝絵》の成立について延文5年 (1360) をやや遡った頃を推定し (中略) 金蓮寺

本の制作時期についても佛光寺本《親鸞伝絵》の成立からさほど時を隔てないであろう（中略）金台寺本や金光寺本についても14世紀半ば以降にあって佛光寺本《親鸞伝絵》や金蓮寺本の制作とさほど時を隔てず、これ以降に繰り返して制作が行われたとみることの方が適切である（中略）金台寺本、金光寺本にあらわれた各場面について、むしろ「かなり原本に近い図様」の古様さをよく継承するものであったとみるべきであろう。図様の古様さだけを根拠にして制作時期を判断することの難しさ・危うさの一端がそこには示されている。絵巻における制作年代を検討してゆくうえで、その推定に客観性をもたせるためにも、あわせてこれにともなう詞書の執筆者を確定してゆく作業はやはり避けて通ることはできない（津田2018:429）。

- (5) 三本に共通していえることは、供養を受けている集団が4つに厳然と分けられている点である。第1は一遍ら時衆を中心とした堂の上での共食している集団である。第2には寺庭における一般乞食僧ともいべきさまざまな僧衣を着た僧たちの輪である。第3は乞食非人と「いざり」などの不具者たちの輪であって、そこでは乞食非人と不具者が共食関係にあることに注目しなければならない。そして第4にその輪からも排除され最も穢れた存在として差別された癩者たちの輪である。身分制的諸関係は食事のような最も基本的な場面においてこそつらぬかれるものなのである（黒田1986b:148）。
- (6) 延久本の〈法興寺落慶〉に描かれているのは中宮寺であることが判明しており（東京国立博物館2010）、延久本が描かれた院政時代には既に法興寺と中宮寺の錯綜が生じていたことが窺われる。また本證寺本に描かれている〈法興寺落慶〉には元興寺という詞が附されているものの、元興寺は法興寺が平城京に移転した後の名称であることが判明しており、延久本と同様に法興寺に関する錯綜がみられる。
- (7) 橘寺本は〈法興寺落慶〉は描かれておらず、〈無遮会〉のみが描かれている（奈良国立博物館1965）。
- (8) 14世紀初葉から15世紀にかけて《融通念仏縁起絵》制作の勧進を担った人々は浄土宗鎮西派に近い存在であった（徳永2012）。
- (9) 正和原本→Freer本→知恩院本→義尚本→根津美術館本→大念仏寺本（A）→聞名寺本→Chicago/Cleveland本→家高本→明德版本他（徳永2012）。祖本（正和3年1314年）→Chicago/Cleveland本（14世紀前葉）→知恩院本（永徳2年1382年）→根津美術館（永徳3年1383年）→醍醐寺本（至徳元年1384年）・Freer本（至徳元年1384年）→東博本（至徳2年1385年）→明德版本（明德2年1391年）（阿部2013b, 2018）
- (10) 《曆応模本》良忍と、その手に持ち広げる名帳に結縁する人びと（尼、女人2人、公家の合計4人）の姿がある（阿部2013c:42）。《知恩院本》名帳を手を持って広げる良忍の許へ、結縁のため集まり来たる人びとは、尼、僧、男性、小児、漁人（或いは乞食か）、いざり、乞食、女人、公家ら9人。（中略）〈他者〉として登場するのが、遊行する宗教者の一類である暮露と鉢たたきである。《Freer本》漁人を取り囲む尼、僧、男性、小児、遊行行者に加えて、乞食の子ども、いざり、稚児が環を作る。（中略）猿引きの夫婦が登場する。（中略）山伏の姿も見える。（阿部2013c:43）《聞名寺》彼らの前で鉢たたきと鉦叩きが念仏踊りをし、（中略）その往来を乞食の子どもと老人が視線を向けることなく通り過ぎていく。《東博本》鹿杖を立て膝をつく鉢たたきの前には、犬神人が2人居座り、（後略）。《明德版本》漁人に結縁する人びとの前には、いざり、男2人（箱を背負う男は傀儡師あるいは絵解か）、犬神人2人が座る。（中略）その右上に3人の暮露がおり、築地側に3人の乞食（いざりなど）が集う。（中略）鹿杖を持つ鉢たたきと鉦叩き、放下僧、子供を背負う乞食、鼓を持つ小髻女を連れた髻女らが集まり来る（後略）（阿部2013c:44）。
- (11) 近世以前は「啞」を意味する語彙や字彙には「瘖」「瘖瘖」、さらには「瘖」の仮借字としての「暗」などがあり、「啞」のみが用いられてきたわけではない。
- (12) 導御の非人施行は、おのずと融通念仏の聖と非人救済活動の歴史を物語る。良鎮が良忍の勧進の〈始まり〉の場に乞食非人の姿を描いたのは、彼自身がそうした伝統に根ざして活動した勧進型であったことも背景にあらう（阿部2013c:51）。そうした結縁の始まりは良忍による勧進の始まりの段にこそ示されており、一挙に勢揃いする職能民や乞食非人たちもまた、それぞれ勧進と結縁の空間の中にあらわされなければならない（阿部2013c:52）。絵解や猿牽（猿飼）、鉦叩、胸叩といった門付・大道芸を行う芸能者、桂の女（桂女）や櫛売、葉売といった行商人がそれであり、これらの職能は、経済流通・交通の変化・発展や、芸能の発展、民間仏教の布教といった時代背景をもって出現したものである（阿部2013c:54）。
- (13) *Romance of Alexander, Alexander and Dindimus*, Li Livres du Graunt Caam Bodleian Library MS. Bodl.264 <https://digital.bodleian.ox.ac.uk/ID:6fb21473-8721-4b74-8916-8519575b90cc> (2021年1月22日).
- (14) Hogengerg, Frans 1558 *Lent and Carnival*. <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/408590> (2021年1月22日).
- (15) Bruegel, Pieter, the Elder 1559 *The Fight between Carnival and Lent*.

- https://media.thisisgallery.com/works/pieterbruegel_06 (2021年1月22日).
- (16) 金蓮寺本《遊行上人縁起絵》時衆の美術と文芸展実行委員会編(1995)『時衆の美術と文芸：遊行聖の世界』東京美術：132.
- (17) 金光寺本《遊行上人縁起絵》黒田日出男(1986)『境界の中世・象徴の中世』東京大学出版会：146.
- (18) 東博本《遊行上人縁起絵》e 国宝 <http://www.emuseum.jp/detail/100328> (2021年1月22日).
- (19) 光明寺本《遊行上人縁起絵》最上義光歴史館編(2013)『重要文化財 光明寺本 遊行上人絵』山形市：34-36.
- (20) 真光寺本《遊行上人縁起絵》東方書院編(1930)「一遍上人縁起」『日本絵巻全集 第9集』東方書院：40-43. (= 国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1688652/56> (2021年1月22日)).
- (21) 延久本《聖徳太子絵伝》e 国宝 <http://www.emuseum.jp/detail/100205> (2021年1月22日).
- (22) 大蔵寺本奈《聖徳太子絵伝》奈良国立博物館編(1969)『聖徳太子絵伝』奈良国立博物館：図137.
- (23) 広隆寺本《聖徳太子絵伝》田中重久(1943)『聖徳太子絵伝と尊像の研究』山本湖舟写真工芸社：図25.
- (24) 玉堂本《聖徳太子絵伝》東京国立博物館画像検索 <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E0060867> (2021年1月22日).
- (25) 談山本《聖徳太子絵伝》奈良地域関連資料画像データベース <http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/y06/taishieden/index.html> (2021年1月22日).
- (26) 元享本《聖徳太子絵伝》東京国立博物館・国華社・朝日新聞社編(2018)「聖徳太子絵伝 遠江法橋筆」『名作誕生：つながる日本美術』朝日新聞社：66-69.
- (27) 堂本家本《聖徳太子絵伝》奈良国立博物館編1969『聖徳太子絵伝』奈良国立博物館：図403.
- (28) 橘寺本《聖徳太子絵伝》奈良国立博物館編(2007)「特別公開 橘寺秘宝「聖徳太子絵伝」」『歴史読本』52：22-29.
- (29) 六角堂本《聖徳太子絵伝》奈良国立博物館編(1969)『聖徳太子絵伝』奈良国立博物館：図86図406.
- (30) 嘉元本《聖徳太子絵伝》e 国宝 <http://www.emuseum.jp/detail/101298> (2021年1月22日).
- (31) 叡福寺本《聖徳太子絵伝》東京国立博物館・国華社・朝日新聞社編(2018)「聖徳太子絵伝」『名作誕生：つながる日本美術』朝日新聞社：84-85.
- (32) 斑鳩寺本《聖徳太子絵伝》奈良国立博物館編(1969)『聖徳太子絵伝』奈良国立博物館：図113.
- (33) 妙安寺本《聖徳太子絵伝》菊竹淳一編(1973)「聖徳太子絵伝(頂法寺六角堂)」『聖徳太子絵伝：日本の美術91』至文堂：63.
- (34) 本證寺本《聖徳太子絵伝》安城市文化財図録 http://www.katch.ne.jp/~anjomuse/bunkazai_zuroku/shotokutaishi_edem/ (2021年1月22日).
- (35) 本誓寺本《聖徳太子絵伝》奈良国立博物館編(1969)『聖徳太子絵伝』奈良国立博物館：図43.
- (36) 称名寺本《聖徳太子絵伝》奈良国立博物館編(1969)『聖徳太子絵伝』奈良国立博物館：図102.
- (37) 勝鬘皇子本《聖徳太子絵伝》奈良国立博物館編(1969)『聖徳太子絵伝』奈良国立博物館：図131.
- (38) 奈良博本《聖徳太子絵伝》奈良国立博物館収蔵品データベース <https://www.narahaku.go.jp/collection/714-2-2.html> (2021年1月22日).
- (39) 山楽本《聖徳太子絵伝》東京国立博物館・国華社・朝日新聞社編(2018)「聖徳太子絵伝 狩野山楽筆」『名作誕生：つながる日本美術』朝日新聞社：70-71.
- (40) 暦応模本《融通念仏縁起絵》阿部美香(2018)「影印 融通念仏縁起」「大念佛寺所蔵『融通念仏縁起』(暦応模本) — 解題と影印・翻刻」『学苑』937：230-259.
- (41) 知恩院本《融通念仏縁起絵》『融通念仏縁起 智恩院蔵 上・下』(東京文化財研究所蔵).
- (42) 聞名寺本《融通念仏縁起絵》『融通念仏縁起 聞名寺本』(東京文化財研究所蔵).
- (43) Freer 本《融通念仏縁起絵》<https://asia.si.edu/object/F1958.11/> (2021年1月22日).
- (44) 東博本《融通念仏縁起絵》東京国立博物館画像検索. <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E0023873> (2021年1月22日).
- (45) 明德版本《融通念仏縁起絵》松原茂編1991『絵巻融通念仏縁起』至文堂.

参考文献

- 阿部美香(2013a)「融通念仏縁起絵巻の成立」『融通念仏縁起絵巻の成立と展開』17-26.
- (2013b)「融通念仏縁起絵巻の展開」『融通念仏縁起絵巻の成立と展開』27-40.
- (2013c)「新たな「融通念仏縁起」絵巻の誕生」『融通念仏縁起絵巻の成立と展開』41-55.
- (2018)「大念佛寺所蔵『融通念仏縁起』(暦応模本) — 解題と影印・翻刻」『学苑』937：219-267.
- 阿部泰郎(2017)「中世の縁起・説話における「結界破り」と「穢れを負う聖(ヒジリ)」の伝承」『宗教民俗研究』27：88-101.
- 石井正己(1997)「琵琶法師と犬 — 琵琶法師の図像学」『絵と語りから物語を読む』大修館書店：88-136.
- 石村真一・田中みなみ(1997)「鎌倉後期に使用された桶の造形性 — 『遊行上人縁起絵』諸本に描かれた桶と諸外国の桶との比較を通して」『デザイン学研究』44(1)：

- 53-62.
- 太田昌子 (1998) 「法隆寺絵殿本「聖徳太子絵伝」の語りの構造——太子絵伝研究序説」『金沢美術工芸大学紀要』42: 110-91.
- 岡田諦賢 (1894) 『聖徳太子伝暦訳解』 哲学書院.
- 奥田真結子 (2015) 「「穢れ意識」と図像分析」『歴史評論』782: 73-86.
- 加須也誠 (2012) 『生老病死の図像学——仏教説話画を読む』 筑摩書房.
- 片岡耕平 (2017) 「穢れ観念の多様性について——領域間の対話」のために」『宗教民俗研究』27: 71-87.
- 勝田至 (1992) 「中世触穢思想再考」『日本史研究』356: 24-43.
- 加藤康昭 (1978) 「障害者に対する穢れと忌みの思想」『季刊障害者問題研究』13: 59-64.
- 菊竹淳一編 (1973) 『聖徳太子絵伝——日本の美術第91』 至文堂.
- (1976) 「聖徳太子絵伝の図像的系譜」『美術史』25 (3/4): 107-129.
- 黒田日出男 (1986a) 「身分制研究と絵画史料分析の方法——『親鸞伝絵』・『法然上人絵伝』・『遊行上人縁起絵』を読む」『部落問題研究所紀要』87: 56-83.
- (1986b) 「一遍上人絵伝の性格と諸本」『境界の中世・象徴の中世』 東京大学出版会: 140-144.
- (1986c) 「宿の長吏たちの画像」『境界の中世・象徴の中世』 東京大学出版会: 144-154.
- 桑原洋子 (2014) 『前近代における社会福祉法制』 信山社.
- 河野勝行 (1987) 『障害者の中世』 文理閣.
- 五月女晴恵 (2016) 「秦致貞から常磐源二光長への姿態表現の継承——法隆寺東院絵殿旧蔵「聖徳太子絵伝」の姿態表現に着目して」『北九州市立大学文学部紀要』85: 39-73.
- 時宗宗典編集委員会編 (1974) 「一遍義集」『定本時宗宗典 (上巻)』 時宗総務所.
- 編 (1979) 「一遍上人年譜略」『定本時宗宗典 (下巻)』 時宗総務所.
- 末森明夫・高橋和夫 (2016) 「非文字史料における聾啞表象および手話言語表象」『聾史研究』3: 19-50.
- 末森明夫・高橋和夫 (2017) 「椀叩と啞表象」『風俗史学』64: 53-63.
- 末森明夫・新谷嘉浩・高橋和夫 (2016) 「『豊国祭礼図屏風』「非人施行」における障害者表象及び聾啞表象」『障害学研究』11: 182-207.
- 砂川博 (2007) 「第5章『一遍上人絵伝』における『一遍聖絵』の需要——九州遊行」『中世遊行聖の図像学』218-223.
- 田上隆司 (1994) 「障害者救済から見た『一遍上人語録』」『作新学院女子短期大学紀要』18: 97-118.
- 田代尚光 (1947) 『融通念佛縁起の研究』 明鏡社. (=1976『増訂 融通念佛縁起の研究』 名著出版社.)
- 津田徹英 (2018) 「詞書の筆跡からみた金蓮寺本——『遊行上人縁起絵』の位相」『美術研究』423: 401-466.
- 東京国立博物館編 (2010) 『聖徳太子絵伝3』 東京国立博物館.
- 編 (2014) 『聖徳太子絵伝 (四幅本) 2』 東京国立博物館.
- 徳永誓子 (2012) 『融通念佛縁起』の研究——物語絵にみる日本中世の信仰世界』 博士論文: 総合研究大学院大学.
- 中村ひの (2017) 「『遊行上人縁起絵』伝本系統の再考に向けて——遠山記念館本及び常称寺本の調査から」『千葉大学大学院人文社会科学部研究プロジェクト報告書』321: 60-70.
- 原田信雄 (2020) 『「共食」の社会史』 藤原書店.
- 服藤早苗 (2012) 『古代・中世の芸能と買売春——遊行女婦から傾城へ』 明石書店.
- 服部敏良 (1945) 『奈良時代醫學の研究』 東京堂.
- (1955) 『平安時代醫學の研究』 吉川弘文館.
- (1964) 『鎌倉時代医学史の研究』 吉川弘文館.
- (1971) 『室町安土桃山時代医学史の研究』 吉川弘文館.
- (1978) 『江戸時代医学史の研究』 吉川弘文館.
- 船田淳一 (2017) 「古代・中世における〈穢れ〉研究の現状と課題——「領域間対話」に向けた準備作業として」『宗教民俗研究』27: 52-70.
- 細田あや子 (2002) 「「井戸の中の男」・「一角獣と男」・「日月の鼠」の図像伝承に関する一考察」『人文科学研究』109: 89-121.
- 宮次男 (1968) 「宗俊本遊行上人縁起絵諸本略解」 角川書店編集部 (編) 『日本絵巻物全集第23巻 遊行上人縁起絵』 角川書店: 52-56.
- (1979) 「遊行上人縁起絵の成立と諸本をめぐって」『新修日本絵巻物全集第23巻』 角川書店.
- 村松加奈子 (2008) 「中世聖徳太子絵伝の展開と受容」『第4回国際研究集会報告』314-325.
- (2012) 「聖徳太子絵伝の制作拠点に関する一考察——四天王寺と法隆寺を中心に」『アジア遊学』154: 26-37.
- 横井清 (1974) 「中世民衆史における「癩者」と「不具」の問題——下剋上の文化・再考」『花園大学研究紀要』5: 79-118.
- 吉岡諒 (2012) 「叡尊・忍性の救済活動とその歴史的性(上)」『仏教史研究』49: 79-111.
- Saint-Loup, Aude de. (1993) "Images of the Deaf in Medieval Western Europe." In Fischer, Renate and Lane, Harlan (eds.) *Looking Back: A Reader on the History of Deaf Communities and their Sign Languages*. 379-402. Hamburg: Signum-Verl.